

一 般 演 題 抄 録

27. CD45 および CD34 抗体を用いた Gating 法による少数白血病細胞の検出

山口逸弘 谷 正弘 秋山利行

近畿大学医学部附属病院中央臨床検査部血液検査室

モノクローナル抗体を用いたフローサイト・メトリ法による白血病細胞のタイピングは CD45 Blast Gating を用いることにより、通常の血液細胞に混入している白血病細胞の解析が可能となった。

しかし、CD45 Blast Gating を用いても、赤芽球が出現している例や、標的となる細胞が極少数の場合は CD45 Gating のみでは困難なものも少なからず存在する。

一方、CD34 は白血球の分化の低い段階で認められる抗原で急性白血病の約80%に発現し、成熟した血球では発現せず、白血病のタイピングで良く用いられる抗体である。

今回、我々は CD45 と CD34 の2抗体を同時に用いた Blast Gating を考案した。

対象および方法

検討材料は平成11年7月より12月までに当検査室に提出された造血器腫瘍患者の末梢血および骨髄液43例である。

測定は全血法で細胞表面抗原を RPE-Cy-5 標識

抗体 CD45 T29/33 (Dako) と PE 標識抗体 CD34 HPCA-2 (ベクトン) を用い標的細胞の Gating を行った。

結 果

AML 14例, ALL 3例, ATL 4例, CLL 3例, CML 3例および MDS 16例中本法で標的細胞の Gating が可能であったものが ATL 4例と CLL 3例を除いた36例であった。

また、本法で Gating を行った標的細胞の割合が30%以下の症例20例で本法と CD45 のみの Gating 法を比較したところ、標的細胞の割合が5%以下となると CD45 のみの Gating 法では10例中8例が他の細胞の混入により Gating が不能となった。

ま と め

本法は標的細胞が極少数の例で有効であった。また、CD34 の蛍光強度の差で腫瘍細胞の分化レベルの差による Gating も可能なため、一般的に用いられている CD45 Blast Gating と比べより多くの情報が得られると期待される。

28. 当施設における末梢血幹細胞移植

伊藤志保 三鬼あかね 川本佳代 麻田真由美 峯 佳子

藤田往子 金光 靖 椿 和央* 芦田隆司** 金丸昭久**

近畿大学医学部附属病院輸血部 *同奈良病院 **同医学部第3内科学教室

目 的

末梢血幹細胞移植は、事前に採取・保存した末梢血幹細胞を骨髄破壊的治療後の血液学的再構築に利用する造血幹細胞移植である。今回、当施設で行われた末梢血幹細胞移植について検討したので報告する。

対 象

1993年4月から1999年12月の間に当施設で施行した末梢血幹細胞移植33症例(非ホジキンリンパ腫17例, 精巣腫瘍5例, 卵巣癌4例, 急性リンパ性白血病2例, ホジキン病1例, 神経芽細胞腫1例, 悪性奇形腫1例, 脾芽腫1例, 菌状息肉腫1例)を対象とした。

結果および結語

平均採取細胞数(CFU-GM数)は、1回の採取あたり $14.8 \times 10^5/\text{kg}$, 平均移植細胞数(CFU-GM数)は $5.1 \times 10^5/\text{kg}$, 移植までの期間は平均4.0ヶ月で、移植時の解凍細胞の viability は82.2%であった。

造血回復は、白血球が $500/\mu\text{l}$ 以上になるまで平均10日(8~14), 血小板が $2 \times 10^4/\mu\text{l}$ 以上になるまで平均16日(7~44), 網状赤血球が1%以上になるまで平均14日(10~33)であった。ほとんどの症例において、すみやかな造血回復がみられ、超大量化学療法後の支持療法として末梢血幹細胞移植は有用であると考えられる。また、安全な移植を行うことができる十分量の末梢血幹細胞を供給できうと考えられた。